

東京農工大学科学博物館(東京・小金井市)

製糸業の歩み伝え130年

明治以降、輸出産業の花形として日本の近代化を支えた生糸の生産。その歩みを伝える、130年あまりの歴史ある博物館だ。

展示物が並んでいるだけではない。エンジニアたちが展示機械を動かす。手紡ぎや織物など、繊維関連の技術を4年間かけて本格的

に学ぶ人々がいる。学生たちが「サイエンスコミュニケーション」活動の一環として、来館者に解説したり、子ども向け科学教室の内容を考えたりする。人や機械、技術が息づいている博物館でもある。

養蚕を脅かす病気を防ぐため、1884(明治17)年、政府は蚕病試験場(東

京農工大学工学部の前身)

を設立。その2年後、試験場に設置された参考品陳列場が、博物館の始まりだ。

病気対策が始まりとあって、19世紀にフランスの養蚕業に大打撃を与えたという微粒子病や、胴回りが真っ黒になる胴黒病など、さまざまな病気の蚕をロウで精巧に再現した標本が展示されている。なかには大ぶりの大根サイズの模型も。

思わずのけぞってしまうほどのインパクトだ。学芸員の齊藤有里加さんは「十分な写真もデジタル教材もなかった時代、病気にかかるとうなるのかを学ぶ、貴重な教材でした」と話す。

国内外のさまざまな品種の蚕がつくった繭の標本群は、明治時代から使われてきたという重厚感のある展示ケースと共に、目を引く美しさだ。小指の先ほどの小さい繭もあれば、数匹の蚕が集まってつくるとい

うバナナ大の繭もあり、形も

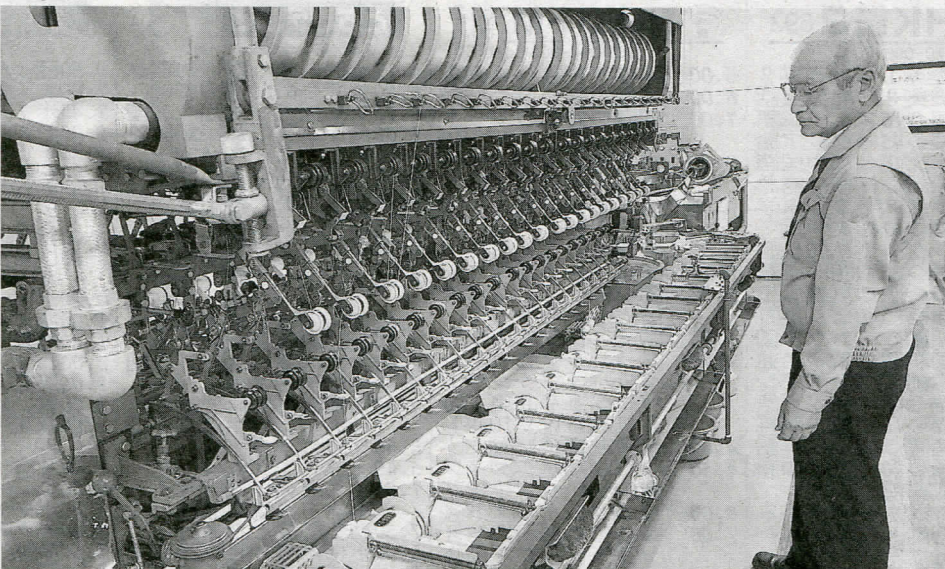
さまざまで面白い。

3月30日まで開催中の企画展「繭から糸を繰る」は、技術の変遷と未来へは、手動の糸繰り器から、工場での器械製糸の様子を描いた錦絵、繭から生糸を繰る全工程を自動化した繰糸機まで、繰糸技術の変遷を振り返る内容だ。

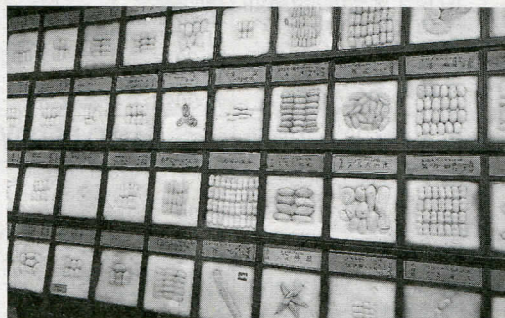
この自動繰糸機や、自動織機などの大きな機械は、エンジニアたちが毎週火曜日に動かしている。

機織りというと、「鶴の恩返し」の鶴がしているように、シャトル(杵)を縦糸の間に滑らせ、緯糸を打ち込む様子が思い浮かぶ。が、いま量産されている布地の多くは、水または空気を高速で噴出させて緯糸を運ぶ織機で、つくられているという。大きな機械音を響かせながら、目にも止まらぬ速さで緯糸が飛ばされ、布地が織り上げられていく様子を目の前で見られる、貴重な機会だ。

(三島あずさ)

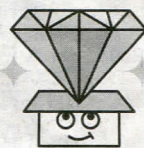


1970年代に日産自動車が製造したニッサン自動繰糸機HR-2型。稼働している様子を見学できる日もある



明治37年ごろに国内外で収集された繭の標本群。小指の先ほどの繭からバナナ大の繭まで、サイズも形もさまざまだ。いずれも東京農工大学科学博物館

わがまち宝館



■東京農工大学科学博物館
(042・3388・7163)
■JR中央線東小金井駅から徒歩10分。午前10時〜午後5時(入館は4時まで)。日曜、月曜、祝日休館。無料。